

## 時代を駆ける：岡部健／6 「お迎え」は死の作法

◇TAKESHI OKABE

《訪問診療を始めた当初は、1人で年間100人近くをみとった》

毎日12軒以上は回っていましたね。容体急変などの夜間呼び出しには365日、1人で対応していました。大変だが、面白かった。在宅医療は患者をトータルでみるから総合人間学のようなのです。

仙台市の男性の家を訪ねた時、「戦死した兄貴が来ているんだけど、何もしゃべってくれない」と落ち着いて語るの、びっくりしました。「見えないのか」と聞かれ、「見えないよ」と。亡くなった家族や友人が現れる「お迎え」です。死生観が変わりました。

《死の問題に関心を寄せ、03年にはタナトロジー(死生学)研究会を発足させた》

東京大特任教授の清水哲郎さんや静岡大教授の竹之内裕文さんら哲学、宗教学の研究者が中心です。飲み会で竹之内さんに「本をたくさん読んでいても、死の現場を知らないだろう」と吹っかけたら、乗ってきました。毎月の定例会では患者や遺族、死をみとった診療所スタッフが体験を語り、研究者が各自の視点から聞き取りをします。

研究会のメンバーたちと一緒に在宅患者の遺族に調査もしました。驚いたことに、回答366件のうち42%で、他人には見えない人や風景を患者が語っていた。亡くなる1カ月前に「部屋の隅に母ちゃんが来た」と言い、「迎えに来たのか」と会話をした80代男性もいました。結果は論文にまとめ、学術誌や学会で発表しました。

《お迎えは穏やかに死を迎える作法の一つと考えるようになった》

診療所のカルテには、患者の話を記録する「生言葉ファイル」の欄があり、そこにもお迎え体験は出てきます。もし病院で「死んだ母ちゃんだ」と言ったら、幻覚と言われ、治療の対象になってしまう。在宅で最期を迎えるからこそ、患者も口にできると思います。

知り合いの医師には、「お迎えなんてない」と一蹴する人もいました。医療者の認識はそんなものです。私も勤務医時代、患者の最期の際に、心電図や血圧の数値ばかり見ていました。死を迎える作法を、病院は奪ってきたと思います。

=====

聞き手・下桐実雅子／火～土曜日掲載です

=====

### ■人物略歴

◇おかべ・たけし

日本ホスピス緩和ケア協会理事。61歳(写真は03年、所属する学会参加のため訪れた東京湾の海ほたるパーキングエリアで＝本人提供)

毎日新聞 2011年5月31日 東京朝刊